

ティディム・チン語研究

桂 満 希 郎

序 説

§1 本稿は私が昨年、1963年に、大阪において調査する機会を持つことの出来たティディム・チン語についての研究の一部であって、ビルマ語と比較した場合の様な対応関係を見出されるかという、比較言語学的観点にたった考察である。しかし、現段階では、これらの言語の全体的な比較を行ない、その共通形を再構成することは未だ出来ない。そのためには、近い関係にあると考えられる更に多くの言語を、同時に対象として行かねばならないであろう。したがって、本稿ではビルマ語とティディム・チン語の極く一部分の比較を扱ったに過ぎないけれども、これら二つの言語を更にチベット語などと対比した場合に見出されるいくつかの興味ある事実についてもふれた。

本論に入る前に、私が行なった調査とこの言語とについて、概略的な説明を付け加えたいと思う。

§2 ティディム・チン語について¹⁾：

一般にチン語、あるいはクキ・チン語の名をもって呼ばれている言語は、極めて多くの方言を含んでいる。これらの言語は、主として、ビルマ西部のチン特別区域、東パキスタンのチタゴン、インドのアッサム、マニプール等で話されている。通常チン諸語は、北部チン、中部チン、古クキ²⁾、南部チン及びメイティの五方言に大別される。ここに取りあげるティディム・チン語はこれらの中の北部チングループに属し、上記チン特別区域の北端に位置するティディム Subdivision の公用語として用いられている。

今、北部チングループに属する諸言語を取りあげて、大体の人口及び話されている地域を示すと次の通りである³⁾。

- | | | | |
|-----------|----|----------|----------------------------------|
| (1) Thādo | 方言 | 約 6,000人 | ティディム Subdivision 北端, ソムラ, マニプール |
| (2) Sōktē | 方言 | 17,000人強 | ティディム北部のマニプール河流域 |

1) この項については、*Linguistic Survey of India (L.S.I.)* vol. III, pt. 3; *Mranmaa Swaysum Kyâm Pathama twây*. Rangoon, 1955; Sten Konow: "Zur Kenntnis der Kuki-Chinsprachen" *ZDMG* Bd. 56. 1902. を参照。

2) 上記 Sten Konow における "Alt-Kuki".

3) 上記 *Mranmaa Swaysum Kyâm* による。

- | | | | |
|-----|--------------|----------|--------------------|
| (3) | Kamhau 方言 | 20,000人強 | ティディム北部 |
| | (=ティディム・チン語) | | |
| (4) | Siyin 方言 | ? | ティディム南部 |
| (5) | Rältē 方言 | ? | カチャール及びルーシャイ Hills |
| (6) | Paitē 方言 | ? | ルーシャイ Hills |

ティディム・チン語は、以前はカムハウ方言と呼ばれていたものであるが、この地域の公用語と指定されてからティディム・チン語と呼ばれるようになった。この言語を話している人達自身は、カムハウ方言という呼び方を好まないようである。現在、この言語はティディム Subdivision の全小学校で教えられており異なった方言を話す人達の間でも、十分に伝達の用を果している⁴⁾。

ティディム・チン語は、キリスト教宣教師によって考案されたローマ字による正書法を持っているけれども、この正書法は言語の音素体系を必ずしも正確に表わしているとはいえない。また、トネームの表記は全く付けられていない。例えば、「逃げる」[ta:i 平板型]と「しかる」[ta:i 上昇型]とは、共に“tai”と表記されている。更に、「突きさす」[sun 下降型]、「午後」[su:n 下降型]は両者とも“sun”で表わされている。この様な理由から、本稿では私自身の音素表記を用いた⁵⁾。

§3 調査の方法：

インフォーマントはティディム出身の Lian Khang Mang 氏である。同氏はティディムの小学校を出て、後に英語とビルマ語とを学んだ。したがって、同氏はこの言語の本当の native speaker であって、インフォーマントとして適当だと考えてよいであろう。1963年5月から1964年3月まで、留学生として大阪外国語大学で日本語の授業を受けられたが、その間に約4カ月にわたって協力してもらった。63年7月から10月まで、週2～3回の割で調査を行ない、1回の所用時間は約2時間であった。

言語を調査し資料を収集するためには、まず当該言語の音素、トネームの体系をつかむことが必要である。私の場合、約600の基礎的な単語のリストを準備し、これによって得られた記録をもとにして音素及びトネームの体系を見出すことが出来た。なお、質問はビルマ語を通して行った。次の段階として、限られた時間内で文法体系を出来るだけ広く理解するために、ティディム Subdivision で用いられているテキスト⁶⁾にもとづいて文法分析を行なった。最後に、6つの folktales を録音することが出来た。収集した語彙の数(固有名詞、代名詞、数詞、種

4) 私のインフォーマント、Lian Khang Mang 氏による。

5) したがって、他の方言形につけられた符号(e.g. ā)は母音の長いことを示すのに対して、私の表記のそれはトネームを表わすものであるから、両者は全く別のものである。また、ビルマ文語形のトネーム類IIは“^”でもって表わす。

6) *Lai Sinna Bu, Nampat* 1. Rangoon, 1950; *Lai Sinna Lai Bu, Tedim Kam, Tan III.* Rangoon, 1955.

々の付属語は除く)は約1,500である。

1. 初頭子音について⁷⁾

§4 ティディム・チン語とビルマ語の二言語を対比した場合、一見ただけで相互の関係が明らかであり共通の形に由来すると考え得る若干の語彙がある。これに対して、関係ある他の言語を対象に加えた場合、あるいは形態論的な考慮を加えた場合にはじめて、相互の関係が明らかとなる様な語彙が存在する。まず前者について、ティディム・チン語(以下 T. Ch. で表わす)とビルマ文語(以下 W. Br. で表わす)との対応例を示すと次の通りである。(なお、チベット文語形(W. Tib.)の対応形をも掲げておく。)

1) T. Ch. p- : W. Br. p-			cf. W. Tib.
《薄 い》	páa	pâa-	phra-ba
《花》	paak	pân	h̄bar-ba «to bloom»
《与える》	pía	pê- < piy ²	sbyin-ba
《体》	pùm	pum «a form»	—
《丸 い》	púm	pum- «to swell up»	—
《祭》	p`oy	pwây	—
2) T. Ch. t- : W. Br. t-			
《到着する》	tún	toŋ < tuŋ	thug-ba
《鋤》	tùu	tuu-rwâŋ	—
《孫》	túu	tuu «a nephew»	—
《掘る》	tów	tûu-	dru-ba
《抱く》	tooy	tway- «to make cling to»	—
3) T. Ch. K- : W. Br. k-			
《いためる》	kaŋ	kaŋ-	—
《落ちる》	kía	kya-	h̄gyel-ba
《曲がる》	kùay	kwe- < kuy	dgu-ba
《丸》	kúa	kô < ku ²	dgu
4) T. Ch. kh- : W. Br. kh-			
《苦い》	kháa	khâa-	kha-ba
《かたい》	khâl	khây-	gar-bu «to be solid»
《落とす》	khìa	khya-	h̄gyel-ba
《煙》	méy-khuu	m`i-khô < khu ²	—

7) この系統の言語の音節構造は CVC あるいは CV# である。C- 及び -VC 又は -V# を、それぞれ一つの単位として考えるのが妥当である。

5) T. Ch. s- : W. Br. s-

《肉》	sáa	sâa	ša
《死ぬ》	sii	se- < siy	ši-ba
《学ぶ》	sín	saŋ-	—
《木》	síŋ	sač	šiŋ
《肝臓》	s`n	'a-sâñ	mčín-pa

6) T. Ch. k- : W. Br. h-

《あれ》	hua	ho < hu	—
《ほえる》	hooŋ	hoŋ-	—

7) T. Ch. ' - : W. Br. '-

《眠る》	•iʔ-muu	'ip-	gzim-pa (respective)
《袋》	•ip	'it	—
《家》	•`n	'im	khyim
《集り》	•uk	-'up	sgrug-pa «to collect»
《声》	•óo	'ó- «to cry»	—

8) T. Ch. l- : W. Br. l-, hl-

《道》	lám	lâm	lam
《中心》	laay	'a-lay	—
《中》	lak	-lat	—
《暖かい》	lum	lum-	dron-mo
《死体》	luaŋ	'a-lôŋ	—
《四》	lii	lê < liy ²	bži < *bli
《鈴》	lòŋ	khôŋ-lôŋ «a large bell»	a-loŋ
《車》	léŋ	hláñ	—
《舌》	ley	hlyaa	lče
《もぎ取る》	lów	lu-	—
《なめる》	líak	lyak-	ldag-pa
《かたまり》	lóm	-lûm	—
《ノミ》	úy-lii	khwê-hle < khuy ² -hliy	—
《流れる》	lùan	lwan- «to move as a serpent»	—

8) T. Ch. m- : W. Br. m-

《目》	mit	myak	mig
《名前》	min	'a-mañ	miŋ

《 火 》	méy	m'í	me
《 毛 》	m'ól	'a-mwê < muy ²	—
《 王 》	maŋ	mâŋ	—

9) T. Ch. n- : W. Br. n-, hn-

《 病 む 》	naa	naa-	na-ba
《 鼻 》	nàak	hnaa	sna
《 太 陽 》	nii	ne < niy	ñi-ma
《 二 》	ni [?]	hnač	gñis
《 君 》	náj	nâŋ	naŋ
《 低 い 》	níam	nim-	snyan-pa
《 嗅 ぐ 》	nàm	nâm-	mnam-pa

10) T. Ch. ŋ- : W. Br. ŋ-

《 五 》	ŋaa	ŋáa	lŋa
《 魚 》	ŋáa	ŋáa	ñá

11) T. Ch. v- : W. Br. w-

《 荷 》	vàn	wan	—
《 空 》	vàan	wân «surrounding space»	—
《 豚 》	vok	wak	phag
《 熊 》	vom	wam	—

以上にあげた語彙は相互の関係が最も明らかなものだといえるが、これらの他に、平行的なものとして、次の様な例をあげることが出来るであろう。

a) T. Ch. b- : W. Br. p- として、

《 モ グ ラ 》	buy	pwê < puy ² «a bamboo rat»	byi «a rat»
《 豆 》	bée	páy	—

b) T. Ch. p : W. Br. ph-

《 祖 父 》	puu	'a-phô < phu ²	mes-po
《 父 》	páa	'a-pha	a-pha

c) T. Ch. t- : W. Br. th-

《 ナ イ フ 》	táa	thâa	sta-ri
《 そ れ 》	tua	tho < thu	de

d) T. Ch. kh- : W. Br. k-

《 ミ ツ バ チ 》	khuay	kwây	—
-------------	-------	------	---

e) T. Ch. g- : W. Br. kh-

《盗む》	gúu	khô- < khur ²	rku-ba
------	-----	--------------------------	--------

f) T. Ch. t- : W. Br. s-

《息子》	táa	sâa	—
------	-----	-----	---

《羊》	tùu	sô < suu ²	—
-----	-----	-----------------------	---

《爪》	tín	sañ	sen-mo
-----	-----	-----	--------

g) T. Ch. th- : W. Br. s-

《新しい》	thak	sač-	gsar-ba
-------	------	------	---------

《殺す》	that	sat-	gsad-pa
------	------	------	---------

《知る》	thèy	si-	šes-pa
------	------	-----	--------

《三》	thum	sûm	gsum
-----	------	-----	------

上記 f), g) 及び 5) の例から, ビルマ文語形の s- は, ティディム・チン語と比較した場合, t-, th-, s- に分かれるが, どの様な過程を経ているのか, また元来異なった形のものがビルマ語においてすべて s- となったのか, あるいは一つの共通形であったものがティディム・チン語内部において三つの異なった形に分かれたのか, 現在の段階ではこれらの問題を解決することが出来ない。これと並行した他の例についても同様である。

h) T. Ch. g- : W. Br. r-, hr-

《骨》	gu [?]	'a-rô < ruu ²	rus
-----	-----------------	--------------------------	-----

《八》	gíat	hrač	brgyad
-----	------	------	--------

《雨》	gua [?]	rwaa	—
-----	------------------	------	---

これ等の他に, T. Ch. z- : W. Br. r- の例としては, 次の例がある。

《地位》	zaa	'a-raa	—
------	-----	--------	---

《百》	zàa	raa	brgya
-----	-----	-----	-------

ビルマ文語の r- に対して g- が現われることは, ティディム・チン語の特色の一つであろう。他の方言では, 通常 r- あるいは l- が対応する。例えば, 《八》を表わす語は Siyin 方言では, 「liet」; Lūshei, 「pa-riat」; Lai, 「ret」である⁸⁾。

§5 ビルマ文語形における初頭子音結合について:

上に示した語彙に対して, もう少しこみいった関係にある語彙として, ビルマ文語で初頭子音結合を有する単語を考えることが出来る。ティディム・チン語においては子音結合は見られない。例えば, 《脚》を表わす単語は, T. Ch. khee; W. Br. khre < khriy である。この例では W. Br. の khr- における第二子音の -r- が T. Ch. では脱落している。これと並行する

8) 上記 L.S.I.

例として、

《しゃべる》	T. Ch. paaw	W. Br. prô-
《牛》	boon	pron «a bison»
《咳する》	khu?	khrôn-
《速い》	man-lán	mran-
《尾》	méy	'a-mrîi

これらの例においては、初頭子音結合の第二の位置に立つ -r- が、T. Ch. ではすべて脱落している。これに対して、初頭子音結合の第一要素が脱落したと思われる形があるが、これらは上にあげた例とは別に考えて行かねばならないであろう。

《聞く》	T. Ch. zaa	W. Br. krâa-
《へび》	guul	mrwê < mruy ²
《地》	léy	mre < *mliy
《水牛》	looy	kywây < *klway ²

T. Ch. zaa : W. Br. krâa に関しては、W. Br. の初頭子音の第一要素である k- が消失しており、T. Ch. の z- は W. Br. の -r- に対応し、その関係は §4 の h) に示した例と同じ関係にあると考えられる。《へび》の例においては、W. Br. の m- が脱落した形、すなわち -rwê < -ruy² と T. Ch. の guul とが対応すると考えられる。この単語にあたるチベット文語形は sbrul である。この W. Tib. の s- を何かの prefix であったと考えれば、s-brul となり、W. Br. の形は brul > mruy, T. Ch. は brul > guul と考えることが出来る。léy «地», looy «水牛」に関しては、W. Br. の mre, kywây がそれぞれ *mliy および *klwây² < *kl^woy から来ていると考えることが出来る。現在 W. Br. で -y-, -r- でもって代表されている単位の中には、中古ビルマ語 (Anc. Br. で略記する) の -l- に来源するものが含まれていることは次の例から解るであろう⁹⁾。

《作る》	W. Br. pru-	Anc. Br. plu-
《孫》	mrê	mliy ²
《恩》	kyê-jû	klañ ² -jô ²

§6 以上 §5 にあげた例は、W. Br. CC'- (C は子音を表わす) の C- に T. Ch. の C- が対応する場合と、-C'- に T. Ch. の C- が対応する場合との二つであるが、これらのほかに、W. Br. の C- 又は CC'- に T. Ch. のゼロが対応する例が見られる。例えば《犬》を表わす W. Br. は khwê < khuy² であるが、これに該当する T. Ch. 語形は úy である。これと平行した例として次の様な単語があげられる。

9) 西田龍雄：「チベット語・ビルマ語語彙比較における問題」『東方学』XV. 1957；同：「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究」II 『古代学』vol. V, No. 1. 1956.

《愛する》	T. Ch. •fit	W. Br. khyač-
《切る》	•áat	khrač- «to scratch»
《糞》	•éek	khye < khiy
《鶏》	•aak	krak
《星》	•aak-sii	kray cf. W. Tib. kar-ma

これ等の例では、W. Br. の軟口蓋閉鎖音に対して T. Ch. のゼロが対応するが、一方 W. Br. の im «家» が W. Tib. khyim «家», T. Ch. •ín «家» に対応するから、ビルマ語・ティディム・チン語ともに、その歴史的過程において初頭子音を失った単語が含まれていることがわかる。ただこの現象はビルマ語よりもティディム・チン語の方が、より著しかったといえるであろう。以上、§5 と §6 とに示した例から、初頭子音に関する限り、その摩滅の度合はビルマ語よりもティディム・チン語において、より進んでいるというべきであろう。

これらの語彙に関しては次の五つの場合を考えることが出来る。すなわち、T. Ch. の C- に
 ① W. Br. の C- が対応する場合、② CC'- の C- が対応する場合、③ CC'- の -C'- が対応する場合、④ T. Ch. のゼロと W. Br. の C- あるいは CC'- とが対応する場合、⑤ T. Ch. のゼロと W. Br. のゼロとが対応する場合である。

2. 主核母音・末尾子音

§7 ティディム・チン語とビルマ文語の主核母音と末尾子音の結合を対比した場合、極めて多様な対応関係を示すことが解る。これらの多様な対応関係の中、いくつかの点について以下に述べたいと思う。

ビルマ文語形 -we < -uy はチベット文語の -ul に該当するが¹⁰⁾、このチベット文語の -ul はティディム・チン語では -ul のまま保たれている。例えば、

《へび》	T. Ch. guul	W. Br. mrwê < mruy ²	W. Tib. sbrul
《毛》	múl	'a-mwê < muy ²	—
《要塞》	kul [?]	kwê < kuy ²	khul-ma

«to bend so that both ends meet»

数は少ないけれども、これらの例から W. Tib. の -ul が共通形の *-ul より来源しているとする根拠はより強くなるであろう。なお、これらの形は、南部チン方言に属する Khami, Khumi においては、-ui あるいは -ui' で現われており、ビルマ文語と平行した形を示している¹¹⁾。

10) 上記、「チベット語・ビルマ語語彙比較における問題」; Paul Benedict: "Studies in Indo-Chinese Phonology" *HJAS* vol. V. 1940.

11) Lorenz G. Löffler: "Khami/Khumi-Vokabulare" *Anthropos* vol. LV. 1960.

《毛》は Khami. mui; Khumi. mui', 《へビ》は Khami. makhruì; Khumi. mawùì' である。一方《銀》を表わす W.Br. 形は *ŋwe* < *ŋuy* であり, W.Tib. 形は *ɖɟul* である点から, T.Ch. 形に対しては, **ŋul* が予想されるが, 実際の形は *ŋùn* である。この《銀》を表わす T.Ch. 形はシャン語からの借用語であった可能性が強い。(cf. シャン語形《銀》*ŋün*⁴)

W.Tib. -ul : T.Ch. -ul : W.Br. -we < -uy と平行するものとして, W.Tib. *gar-bu* «to be solid» : T.Ch. *khàl* «かたい» : W.Br. *khây-* «かたい», W.Tib. *rgal-ba* «to step over» : T.Ch. *kal-súan* «濶歩する» を見出す。すなわち, ① W.Tib. -al : T.Ch. -al : W.Br. -ay, ② W.Tib. -ar : T.Ch. -al : W.Br. -ay の関係に立つ語彙があるが, 上の -ul : ul : -uy の関係と別個に考えねばならないかどうかは, 今のところ決定することが出来ない。なお, W.Tib. -(y)i : T.Ch. -uy : W.Br. -we < -uy の例として, 《犬》W.Tib. *khyi* : T.Ch. •*úy* : W.Br. *khwê* < *khuy*², 《ネズミ》W.Tib. *byi* : T.Ch. *buy* «モグラ» : W.Br. *pwê* < *puy*² «a bamboo rat» がある。《犬》を表わす T.Ch. 形の初頭子音については §6 に述べた通りである。

§8 チベット文語には末尾子音に -r を有する単語があるが, これらの単語における -r には T.Ch. 語の -k 又は -ʔ が対応することがある。この事実は T.Ch. 語の特色の一つだと考えてよいであろう。やはり -r を有する中部チン諸語に属する Lūshei と対比すれば次の通りである。

	W. Tib.	T. Ch.	Lūshei
《新しい》	<i>gsar-ba</i>	<i>thak</i>	<i>thar</i>
《拡げる》	<i>spar-ba</i>	<i>pha</i> ^ʔ	<i>phar</i>
《売る》	—	<i>zuak</i>	<i>zuar</i>
《花》	<i>h̄bar-ba</i>	<i>paak</i>	<i>par</i>
	«to bloom»		
《詩く》	<i>bor-ba</i>	<i>vo</i> ^ʔ	<i>vor</i>
	«to cast about»		
《とびかかる》	<i>spor-ba</i>	<i>bo</i> ^ʔ	—
《星》	<i>skar-ma</i>	• <i>aak-si</i>	<i>ar-si</i>
《鼻》	<i>sna</i> (?)	<i>nàak</i>	<i>hnâr</i>
《くちばし》	<i>mur-h̄gram</i>	<i>múuk</i>	<i>hmūr</i>
	«jaw bones»		
《振りかける》	<i>gsor-ba</i>	<i>so</i> ^ʔ	<i>sor</i>
	«to shake around»		

以上の通り, W.Tib. -r : T.Ch. -k 又は -ʔ : Lūshei -r の対応関係を発見出来るが, ほかに

もこれと平行した関係をもつ方言があるかどうか¹²⁾, あるいはどの様な過程をへてこの様な対応関係が生じるに至ったかを解決するためには, 近い関係にある他のクキ・チン諸言語との比較研究, そしてこれらの各々の言語の形態論的な研究が必要となって来るであろう。しかし, 一般的に見て, 主核母音の形に関していえば, T.Ch. 語は W.Br. よりむしろ W.Tib. により近い形を有しているといつて差支えない。

§9 ビルマ文語の $-e < -iy$ はチベット文語との対応関係では $-i, -a, -u$ に分裂するが, この関係に T.Ch. 語の単語を加えてみると次の様になる。

1) 《死 ぬ》	W. Tib. ši-ba	T. Ch. sii	W. Br. se- < siy
《 月 》	ñi-ma	nii	ne < niy
《 四 》	bži	lii	lê < liy ²
《ノ ミ》	—	-lii	-hle < hliy
《与 える》	sbyin-ba	pía < pí-a (?)	pê- < piy ²
2) 《 脚 》	rkaŋ	khee	khre < khriy
《 糞 》	skyag	•éek	khye < khyiy
3) 《 水 》	čhu	túuy	re < iy

上の例から, これら三つの言語の対応関係は ① W. Tib. $-i$: T. Ch. $-ii$: W. Br. $-e < -iy$, ② W. Tib. $-a$: T. Ch. $-ee$: W. Br. $-e < -iy$, ③ W. Tib. $-u$: T. Ch. $-uu$: W. Br. $-e < -iy$ の四通りが認められる。この点でも, T.Ch. 語は W. Tib. により近い形をとどめているといえるであろう。①の T.Ch. 語形 pía は変った形を示しているが, この語は Meithei では pi; Thādo. pē; Lūshei. pē; Lai. pē であり¹³⁾, 主核母音としては $-i$ 又は $-ē$ が本来の形であり, $-ia$ は T.Ch. 語内部における変化の結果として現われた形と考えた方が妥当であろう。

§10 《祭》を意味する T.Ch. 語は pòoy である。この主核母音および末尾子音の $-ooy$ は W. Br. の $-way$ (pwây 《祭》) に該当する。これと平行する例として次の単語がある。

《水 牛》	T. Ch. looy	W. Br. kywây
《抱 く》	tooy	tway-
		《to make cling to》

これらの例から, W. Br. kywây, tway に対しては, それぞれ, $*kl^{Woy^2} > *klway^2 > kywây$, $*t^{Woy} > tway$ を推定出来るであろう。更に, W. Br. の $-oŋ$ は $*-^{W}oŋ$ から来源していると考えられる点から¹⁴⁾, 次の単語も上の例と平行するものと考えられる。

12) 例えば, 北部チンググループに属する Thādo 方言では《鼻》は nāk である。(L.S.I.)

13) L.S.I.

14) 上記, 「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究」II.

《ほえる》	T. Ch. hooŋ	W. Br. hoŋ-
《鈴》	lòŋ	-lòŋ
《牛》	booŋ	pròŋ

これらの単語に対しては、各々 *h^woŋ, *l^woŋ², *pr^woŋ を推定出来る。これに対して、T. Ch. 語 -uaŋ, -uay : W. Br. -oŋ, -way の関係に立つ単語（《死体》T. Ch. luaŋ : W. Br. 'a-lòŋ, 《蜜蜂》T. Ch. khuay : W. Br. kwây «a dammer bee»）は別の系列に入るものと考えなければならぬであろう。

§ 11 W. Br. における -ač は、T. Ch. 語と対比した場合、① -ak, ② -i[?], ③ -iŋ, ④ -iat に分かれる。これを W. Tib. と対比すれば、

① 《新しい》	T. Ch. thak	W. Br. sač-	W. Tib. gsar-ba
② 《二》	ni [?]	hnač	gñis
③ 《木》	síŋ	sač	šŋ
④ 《八》	giat	hrač	brgyad
《切る》	•áat	khrač	hčhad-pa

以上の例から、T. Ch. 語は W. Tib. により近い形を有していて、W. Br. の -ač には少なくとも W. Tib. の -ar, -is, -iŋ, -ad が含まれていることがわかる。なお、W. Tib. -s : T. Ch. -[?] の例には《骨》W. Tib. rus : T. Ch. gu[?] がある。

これに対し、W. Br. の -aň には、T. Ch. 語 ① -in, ② -eŋ の二通りの形が対応する。

① 《名前》	T. Ch. min	W. Br. 'a-maň	W. Tib. miŋ
《肝臓》	sìn	sâň	mčhin-pa
《爪》	tín	saň	sen-mo
② 《車》	léŋ	hlâň	—

W. Br. の -aň は中古ビルマ語（Myazedi 碑文に代表される）では -aň と -æfi とに分かれている¹⁵⁾。この点から、W. Br. -aň : T. Ch. -in, -eŋ の関係と W. Br. : Anc. Br. のそれとが平行するかどうかはわからないけれども、W. Br. 'a-maň : T. Ch. min : Anc. Br. maň 《名前》の例から、《肝臓》、《爪》の中古ビルマ語形として、それぞれ、*saň², *saň を、また《車》に対しては *hlæfi² を考えられるかも知れない。

結 び

§ 12 以上ティディム・チン語とビルマ語とを比較した結果考えられるいくつかの点について述べたにとどまるが、残された多くの問題は、その来源、変化の過程などを解明するために

15) 上記、「Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究」II

は、より広い角度から考察して行く必要があるだろう。ここにあげたティディム・チン語の単語の数は、収集した全語彙数の一割にも満たず、残りの多くの語彙は直接ビルマ語と比接出来ない形を有している。しかし、その様な語彙も、クキ・チン系諸言語の内部では互いに近い形を示しているものが多くある。また、ビルマ語よりもむしろ他の言語により近い形を提している語彙も若干存在する。例えば、Bodo 系の言語を例に取って示せば、下の様な例がある¹⁶⁾。

《泣く》	T. Ch. kap ; W. Br. ŋo- < ŋu ; Garo. grap ; Bodo. gap
《鉄》	T. Ch. síik ; W. Br. sam ; Garo. sir ; Atong. ser ; Dimasa. šer
《脂肪》	T. Ch. thaaw ; W. Br. čhii ; Garo. to ; Kachari. tháu
《七》	T. Ch. sa-gi [?] ; W. Br. khu-hnač ; Garo. si-ni ; Kachari. sní
《取る》	T. Ch. láa ; W. Br. yuu- ; Garo. ra [?] ; Mech. la
《酒》	T. Ch. zuu ; W. Br. 'a-rak ; Bodo. zǎu ; Garo. čul ; Banpara. zu
《買う》	T. Ch. léy ; W. Br. way- ; Bodo. bai ; Garo. bre

最後の《買う》の W. Br. 形 w- については、*br- > *b- > w- を考えられるであろう。この様な例が他にも多くあると思われる。これらの言語の記述的・比較言語学的研究は今後の重要な課題というべきであろう。

参 考 文 献

1. H. A. Jäschke: *A Tibetan-English Dictionary*. London, 1958.
2. H. A. Jäschke: *Tibetan Grammar*. New York, 1954.
3. A. Judson: *Burmese-English Dictionary*. Rangoon, 1953.
4. E.J.A. Henderson: "Colloquial Chin as a Pronominalized Language" *BSOAS* vol. XX. 1957. pp. 323-327.
5. E.J.A. Henderson: "Notes on Teizang, A Northern Chin Dialect" *BSOAS* vol. XXVI, pt. 3. 1963.
6. S. Konow: "Notes on Kuki-Chin" *I. A.* vol. XXXII. 1902.

16) Robbins Burling: "Proto-Bodo" *Language*. vol. XXXV, No. 3. 1959